

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

言霊の奥の院世界に明かされなかった奥義 子音の説明です。

神々の生成（子音の創生）1

その 366

すでに国を生み竟へて。さらに神を生みたまひき。かれ生みたまう神の名は、大事忍男の神（おほことおしを）。次に石土毘古（いはつちひこ）の神。次に石巢比売（いはすひめ）の神を生みたまひき。次に大戸日別（おほとひわけ）の神を生みたまひき。次に天の吹男の神（あめのふきおのかみ）を生みたまひ、次に大屋毘古（おおやひこ）の神を生みたまひ、次に風木津別の忍男の神を生みたまひ。次に海の神名は大綿津見の神を生みたまひ。次に水戸（みなと）の神名は速秋津日子の神、次に妹速秋津比売の神を生みたまふ。

先天である十七この言霊が活動を開始して、現象の単位である子音を生もうとするにあたって、先ずそれぞれの子音が心の宇宙の中に占める位置・区分を確定するために島（国）を産みました。そして「既に国を生み竟へて、さらに神を生みたまひき」とありますように、後天現象の単位である子音言霊を示す神々を産むことと成ります。そして三十二の神々が生まれます。

そこでこれよりそれぞれの神の名の示す子音について説明して行くことになるのですが、その子音の説明を分り易くするために島々の示す心の区分と、人間の言葉がどのような経路で生まれ発音されて来るか、ということの関連についてお話しすることにしましょう。

107 頁に。（私の 유튜브 にアップした言霊 5 の板書をご覧ください）人間のことばの循環の順序を示す図を描きました。この図を参照しながらお読みください。人が口に出す言葉はどのように生まれ、言葉として発音され。その結末はどうなるのでしょうか。

まず、人間の頭脳の中枢に何かの力動が起こります。先天十七言霊の活動です。しかし、この先天構造の活動は「先天」と名付けられていますように、それだけでは何かが起ったとも何が起ったかとも意識出来ないものです。それが具体的に何を意図し、どんな言葉として発音されるか、また発音された言葉はどう処理され、意図はどういう結末に行き着くか、ということは後天として現象の世界のことに属している、ということができましょう。

それなら人間が発言する言葉は現象(出来事)としてどんな経過をたどるのでしょうか。それは先にお話ししましたように、古事記は三つの段階がある、と教えています。津島・佐渡の島・大倭豊秋津島という三つの区分です。三段階は次のように示されます。

その 367 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

言霊の奥の院世界に明かされなかった奥義 子音の説明です。

神々の生成(子音の創生) 2

その 367

まず第一段階では頭脳中枢に始まった力動が実際にはどんな内容の事柄なのか、という具体的な考えをまとめる段階です。頭の中で何かが起った。それが何なのだろう。「そうだ。お茶が呑みたい」のだ、と考えがまとまっていく工程です。この工程は一見単純で簡単な現象のように思われますが、精密に順を追ってみますと十の現象の行程があると、古事記は教えてくれます。

それを言霊で表わしますと。「タトヨツテヤユエケメ」の十言霊となります。この十言霊の区分が津島だと古事記は教えます。また、言葉の循環という立場から見ますと、この十言霊のことを未鳴(まな)または真名(まな)と呼びます。未鳴とは考えがまとまって行く段階で。まだ有音の言葉とはなっていない、と言う意味であります。これに対して先天の十七言霊を、天名(あな)と呼ぶことがあります。

次の第二の段階は一つの考え。 アイディアとしてまとまったものを、具体的な言葉として組んで行く工程です。「お茶が飲みたくなつた。どんな言葉で誰に頼んで持ってきてもらおうかな」と考えを言葉に組んでいきます。そして有音の言葉として発音されます。これが八つの工程があります。言霊で表しますと。「クムスルソセホへ」の八言霊です。この八言霊を真名と呼びます。またこの区分を古事記は佐渡の島と名付けました。

そして最後の第三段階です。言葉は一度発せられてしまつたら、働きはそれで終わりというわけではありません。「誰々さんお茶を持ってきてください。」と発音されますとその音声は空中を飛び。(現在の通信・テレビなどに見られるように、電波や光波となって飛ぶ場合も同じです) 他人の耳で聞かれ、その人によって言葉が頭脳内で反唱され。(ああ、こういうことをあの人は言ったのだ)と了解され、行動によって処理されます。この後、言葉は先天宇宙に帰り、記憶として印画され言葉の循環はここで終わります。

以上の第三段階の工程は正確には十四あります。そのそれぞれの現象を表す言霊は、フモハヌラサロレノネカマナコの十四言霊です。その十四言霊のうち、フモハヌ四言霊が、発音された言葉が空中を飛ぶ状態です。これを神名(かな)と呼びます。
その 368 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

言霊の奥の院世界に明かされなかつた奥義 子音の説明です。
神々の生成(子音の創生) 3
その 368

次の十音ラサロレノネカマナコは有音の神名が他人または自分の耳の鼓膜を叩き、検討され意味を了解された一個の現象として終結する工程です。この十音はまた真名（まな）と呼ばれます。そして、言葉の一循環が終わり、元の天名に帰着します。このそしてこの十四言霊の区分を古事記は大倭豊秋津島と名付けました。

以上言葉の循環の場と、言霊とその区分である古事記の島の名との関連についてお話ししました。

ここで読者の中にはちょっと奇妙・不思議に感じられた方もいらっしゃるかと思いますが、言葉が生まれ、人に聞かれ検討・了解される言葉の循環の順序を表す言霊の三十二個が、同時に生まれてくる後天子音言霊三十二個そのものである。ということであります。

古事記は、この言霊が生まれてくる順序と生まれてくる言霊全部と同時に説いていることに気付きます。タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホヘ・フモハヌラサロレノネカマナコの三十二子音は同時にその言霊が生まれてくる創生の過程をも示しているのです。このような不思議とも思えることも人間の心と共に言葉の最終要素である言霊にして初めて成し得るところでありまして、こういう奇妙さを「言霊の幸倍（さちは）へ」と呼んでいます。

さて個々の子音とそれを示す信明神名の説明に入る前に、もう一つ前置きの必要なことがあります。今まで母音と父韻についてたびたび解説してきました。またそれについて言霊学ならずとも宗教や東洋の哲学で色々な説明もなされてきました。けれど子音については各宗教でその存在を指摘されてきただけで、その実態については何一つ説明がありません。子音とは何なのでしょう。

その 369 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

言霊の奥の院世界に明かされなかった奥義 子音の説明です。
神々の生成（子音の創生）4

その 369

言霊子音とは現象の最小の単位だということです。物理でいえば物質の原子に当たるということができましよう。子音は父母音の交合によって生まれるのですが、父母音それぞれ分かれば、それによって生まれる子音はすべて説明されるかという、そういう訳でもありません。

人間の場合も父母の結婚によって子が生まれます。その子は父と母の性質を合わせ持っていますが、それだけでこの性質の全てだとは言えません。子は父母から生まれ、そして父母から離れて独立した存在なのです。子は父母からだけでは説明できない何か、を持った第三者です。

さらに心のことで言えば。母音は実在、父韻は知性のリズムともに先天構造の要素ですが、子音は後天的な現象です。現象とは一瞬一瞬変化してやむことのないものです。その現象の単位をどう人間が捉え、自覚し、説明すればよいか、難しいこととなります。例を挙げましよう。善哉（ぜんざい）しるこは、小豆と砂糖と少々の塩で作ります。原料の小豆やその他のものは説明できます。作り方の説明も比較的簡単ですけれど、その全体の味を説明せよと言われたら正確にどう答えたらよいのでしょうか。それに似て現象である子音を捉えることは難しい仕事です。

と言いましても、子音説明のよすが、として古事記にそれぞれのことを示す神様の名前が挙げられています。また、その宇宙区分として島の名もあります。それらを頼りにすれば、子音を自らの心の中にはっきりと捉えることは不可能なことではありません。さあ、この二

千年間、全く説かれることのなかったこと、言霊子音の内容に探索の歩を進めることにしましょう。それはまた古事記と言霊の奥の殿堂に入ることになります。古事記「神々の生成」の本文に戻ることにしましょう。

その 370 につづく

神様の戸籍へ 一休み

371～385 まで

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）5

その 386

既に国を産み終えて、さらに神を生みたまひき。

生まれてくる言霊が精神宇宙の中に占める位置・区分・（国）を確定したので。その言霊子音（神）を生んだということです。そして次々に子音を表す三十二の神の名前が出現してきます。その一つ一つについて順々に解説して行くことになります。

おほごとおしちかみ
大事忍男の神

言霊 タ それを指し示す 神名の大事忍男の神 とは、大いなる現象として（大事）、押し出して来た（忍）

言霊（男）という意味です。

前に 父韻の説明の章で、父韻子とは「精神宇宙全体が そのまま現象となって表れる力動韻」と申しました。

子音タは父韻子の力動韻を、そのまま受け継いで現れた現象、ということができましよう。

自覚している、いないに関係なく、人間が 一つの言葉を発するには、先天構造の宇宙の 十七 個の天名言

霊の力動がなければなりません。

日常生活の中では人はそのことを意識しません。けれどひとたび人が絶体絶命の場面に立たされて「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」と決意した時など、この言霊という現象そのものになるのではないのでしょうか。大昔の人は大空に鳴り響く^{かみなり}雷と同様に、人間の言葉も「^{かみな}神鳴り」であることを知っていたようです。まさしく言葉は神鳴りであり。

宇宙の振動なのです。

先天宇宙が力動を開始して、まず自らそのまま現象子音タとして現れ出ます。

心理学的に言えばその言霊タは人間の「人格の全て」というほどの意味に取れます。古事記や言霊学ではそれを田と表現します。なぜ田なのか、と言いますと次の通りです。人間の精神宇宙は五十言霊で構成されています。この五十個の言霊を以て人間の天与の性能を表しますと、縦五個、横十個に並ぶ五十音表が出来上がります。人間の全人格はこの五十音言霊図で表されます。五十音図は田んぼの形をしていますので、五十音言霊によって表現さ

れた人間の全人格を田というわけであります。古事記で「天照大神の耕していらっしゃる田」などと言えばそのことを指しています。

注1, 万葉集 235 に柿本人麿の作った「^{おおきみ}皇は神にしませば^{あまくも}天雲の^{いおり}雷の上に廬するかも」の歌が載っている。

天皇がお出ましになった^{いかづち}雷の岡の地名と言霊の自覚の神鳴り（雷）とかけた歌である

注2,

その 387 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）6

その 387

石土毘古（いはつちひこ）の神。石巢比売（いはすひめ）の神。

言霊ト・ヨ：石土毘古の石は五十の葉で五十音言霊のこと、土は養うの意、毘古は主体のことで、石土毘古とは、

五十音言霊を育てるチイキシリヒニの八父韻の実際の働きのことでもあります。八父韻の両側に言霊イとトがついて五

十音言霊図の横の十音を形つくります。言霊トは十に通じます。

言霊タとして発現した人間の全人格が一つの行動として言葉になってゆく為に、まず人間の創造の根本知性であるイ・チキシリシニ・㊦のドア(戸)を通ることとも解釈することができます。石巢比売の神の石（いは）は五十葉（いは）で五十音言霊、巢は住家のこと、比売は秘めるの意で、石巢比売の全部で五十音言霊を秘めている住家という意味を示しています。

ウオアエの四母音の宇宙から全てのこの世の中の現象は現出して来ます。言霊ヨは四であり、また世の中の世（よ）にも通じます。人間の行為としての現象は、ウオアエの四つの次元から出てくる以外のものはありえません。先天宇宙が震動して、自ら言霊タと現象として現れたら、次に言霊の全人格を表す五十音言霊図の横の配列で列であるイ・チキシリシニの創造知性が働き、次にその知性の働きを言霊ウオアエの四つの宇宙次元が受け入れる、というメカニズムで、先天構造の実際現象としての働きが始まります。タトヨと続く。子音誕生の最初の動きは以上のように解釈できましょう。

その 388 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。
神々の生成（子音の創生）7

その 388

石土毘古・石巢比売の言霊トヨは日本の古い国名であります豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみずほのくに）の豊であります。日本は言霊五十音の原理によって肇国（ちょうこく）された国であり、その原理の基本は言霊図の横の十音(ト)と縦の列の四音(ヨ)です。日本の国名の語源の一つともなっています。

大戸日別の神。

言霊ツ： 人間のことばの循環の立場から見ます大戸日別の神の大戸とは大いなる十の創造知性(父韻)ふ意で、日とは霊で働きのことは、別は元の場所から離れて現れ出てくること、となります。実際に創造知性の働きである言霊トが夜這いをして言霊ヨである四つの次元宇宙に「ツ」と近づき進む様子を表します。

天の吹男の神。

言霊テ：天の吹男の神の天は先天宇宙、吹きは吹きつけることを、男は主体でここでは父韻のことです。実際には先天活動により父韻を四つの母音に向けて吹き付ける様子です。言霊テは人の手に通じます。言霊テはア次元の言霊であり、選ぶ働きを持っています。父韻をウオアエのどの母音に手を差し延べて吹き付けるか、によって八つの父韻の配列も変わってきます。この次元による八父韻の配列の相違については後章詳しくお話します。

注一、ここでは次元による八父韻の配列を簡単に示す ウ次元「イ・キシチニヒミイリ・ヰ」、オ次元「イ・キチミヒシニイリ・ヰ」、ア次元「イ・チキリヒシニイミ・ヰ」エ次元「イ・チキミヒリニイシ・ヰ」

その 389 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。
神々の生成（子音の創生）8

その 389

大屋毘古の神（おおやひこ）。

言霊ヤ： 大屋毘古の神の大屋は、大きな構造物と言う意です。吹き出した父韻が母音と結びついて、心の中にひとつのイメージとして形を形成して行く様子であります。

風木津別(かざもつわけ)の忍男の神。

言霊ユ： 風木津別忍男の風木津別とは霊と体、主観と客観に分かれるの意味。忍男は押し出す言霊ということ、神名全体で心の中でしだいに一つの考えイメージとなってまとまってきた形が、やはりその内容として霊と体、主観と客観という区別を失うことなくわけ持っており、それが湯の如くに湧き出して行くという現象ということです。

海の神大綿津見の神

言霊工：大綿津見の神とは海に(綿)渡して(津)明らかになる（見）という意味。心の中にイメージが細いところを通して、次第にまとまってくる。それは川の流りに喩えられます。まとまったイメージは言霊として組まれて広い所（口腔）に出て行く。出て行く先は海に喩えられています。川から海への境の線が江です。

その 390 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）9

その 390

このタトヨツテヤユエケメまではまだ霊（気）と音（身）が組まれていません。この間は夢見るゾーンということでしょうか？

ですから氣の流れとしては外に現れてきません。

水戸の神名は速秋津日子（はやあきつひこ）の神、妹速秋津比売（はやあきつひめ）の神。

言霊ケ・メ：水戸は港です。早秋津とは速やかに明らかに渡す、の意。頭脳中の細い川のような処を通して、先天の力動から次第に一つのイメージに考えがまとまり、集約されてきて、いよいよ海である口腔に行き着きました。そこが港です。

そこからは考えが言葉に組まれます。言葉ケ・メは言葉に組まれる直前のイメージとして一つに集約される現象であります。ここでも言霊ケは気であり、霊であり、主体であり、言霊メは芽であり、眼であり、客体であり霊と体を分け持っています。

津島またの名は天の狭手依比売（さでよりひめ）。

以上お話ししました大事忍男の神より妹妹速秋津比売の神までの十神、タトヨツテヤユエケメの十言霊の宇宙に占める位置・区分を島津といいます。津とは渡し場の意。先天の力動が現実の一つの考えにまとまって行くが、まだ言葉としては組まれない真名の時間であります。先天が言葉に渡っていくまでの期間のことです。これはまた天の狭手依比売とも言います。先天から細いところを通して手さぐりするように一つの考えにまとめられるが、まだ言葉としては組まれていない。即ち、秘め(比売)られている区分という意味であります。

なお、ここで大変ユニークで興味ある事柄があります。詳しいことは他の機会に譲りますが、簡単に触れておきましょう。

それは私たちが見る夢のことです。私たちは眠っている時、夢を見ます。また、覚めている時でも、将来ちょっと実現し
そうもないような、大きな希望として心の中に夢を描きます。この夢は何なのでしょう。日本語のそれぞれを作っている。
一音一音の言霊がそれを明らかに教えてくれます。古事記で津島と呼ばれる心の内の区分、そこにはタトヨツテヤユエケメ
の十言霊が展開していることをお話してきました。これら十個の言霊で示される工程を通してして先天活動が現実の考えに
まとめていきます。けれど言葉としてはまだ組み立てられていません。この十個の言霊のうち、終わりの方のユエケメのユメ二つの
言葉が、私たちが見る夢を作ることと深く関係しているのです。今は簡単にそう指摘するだけに留めることにいたします。

その 391 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。
神々の生成（子音の創生）10

その 391

古事記の文章に戻りましょう。島の区分から言いますと島津より佐渡の島に移って行きます。

この速秋津日子（はやあきつひこ）、妹速秋津比売（はやあきつひめ）の二神、河海によりて持ち別けて生みたまふ神の名は、沫那芸（あわなぎ）の神。次に沫那美（あわなみ）の神。次に頼那芸（つらなぎ）の神。次に頼那美（つらなみ）の神。次に天の水分（あめのみまくり）の神、次に国の水分（くにのみまくり）の神。次に天の久比奢母智（くひざもち）の神。国の久比奢母智の神。

この速秋津日子（はやあきつひこ）。妹速秋津比売（いもはやあきつひめ）の二柱、河海によりて持ち別けて生みたまふ神の名は、

意識されない先天の力動が現実。タトヨツ……と十個の真名の現象を経て、細い通路を一つ一つのイメージにまとまっていきます。ここが川に喩えられます。そして速秋津日子、妹速秋津比売の言霊ケ・メに来て、一つの考えにまとまります。次にこの固まった考えが言葉と結ばれ、発声されて行く段階・過程が海です。

頭脳内の細い通路（川）を歩いてよいよ広い海（人間の口の中）に出ようとしています。速秋津日子、速秋津比売、言霊ケ・メまでが河に喩えられ、これから生まれてくる沫那芸の神以下が海というわけです。

沫那芸（あわなぎ）の神、沫那美（あわなみ）の神

言霊ク・ム：先に先天構造の説明で、伊耶那岐・伊耶那美の二神、言霊イ・ワの婚（よば）い（呼び合い）によって現象が生まれると申しました。しかし、それは先天構造の内部のことで意識することの出来ないものです。沫那芸の神・沫那美の神の二神の活動は、伊耶那岐・伊耶那美の二神の目に見えない活動を受けて、後天である現実において吾と汝、霊・体、心と言葉を結びつける働きです。沫那芸の沫はア（吾）とワ（汝）であり、アイウエオとワヰウヱヲであります。沫那芸の芸は気であり霊であります。沫那美の美は身であり、体であり音（言）です。沫那芸の神・沫那美の神、言霊ク・ムは吾と汝を、心と身を、そして霊と音を組み結ぶ働きと言うことが出来ます。まとまった心のイメージを言葉に結び組んで行く活動です。

その 392 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）11

その 392

頼那芸（つらなぎ）の神、頼那美（つらなみ）の神

言霊ス・ル：前の沫那芸・沫那美、言霊ク・ムで霊と言が組まれたものが、この頼那^{つらなぎ}芸の神・頼那^{つらなみ}美の神 言霊ス・ル

で実際に発音される。実際の発音の働きであるを示すために頼（ほお）の字が使われています。

沫那芸・沫那美と同じように頼那芸は霊を頼那美は体を受け持つ。言霊スは澄む・巢・住む・で動作のない状態。

それに対して言霊ルは流・埧埧等で動く状態を示します。

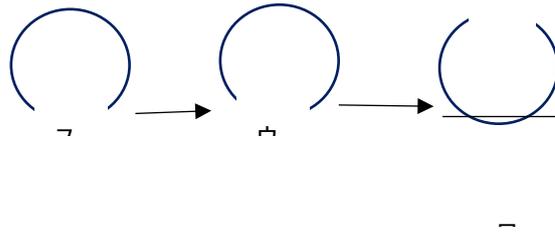
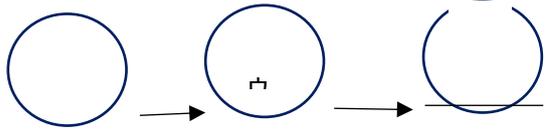
頼那芸・頼那美の働きがうまく調和すれば物事はスルスルと運びます。

頼那芸スに片寄れば物事は停滞しますし、頼那美・ルに片寄れば事は性急に過ぎてしまうこととなります。「立て板に水」の弁舌も言葉の節々に「間」がありませんと、言っていることの意味が聞く者によく理解できないこととなります。よい話術とは弁舌が滑らかであると同時に間の取り方が上手である ことを条件とします。言霊ス・ルの御理解に役立つこ

とができたでありますか？

さて、此所に言霊スが出現致しました。この言霊スのご理解をいただけたこととして、「古事記と言霊」という題でお話しを始めまして、古事記の冒頭の文章「天地の初発の時、高天原になりませる神の名は天御中主の神……」の解説に一言付け加えたいことがあります。古事記の「天地の初発の時」とは何一つ現象が起こっていない心の宇宙のことでありました。

その宇宙の一点に天の御中主の神・言霊ウという、やがては意識の芽となるものが生まれてきます。そして、言霊ウから言霊ア・ワが分れていきます。その状況を図で示しますと下のようになりました。言霊ス（巢・澄）が明らかにされた今では、「天地の初発の時」とは正しくはそれが言霊スであることを確認出来ることとなります。そこで、下の宇宙剖半の最初の図は、次の図に改めることが適当ということができましょう。言霊スは何もない、のではなく、そこから一切のものが生まれているエネルギーで充滿していながら、静かに澄んで動かない状態です。



その 393 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）12

その 393

天の水分（みまくり）の神・国の水分（みまくり）の神

言霊ソ・セ：水分（みまくり）とは水配りの意です。心を言葉と組んで発音するためには水の補給が必要となります。天の水分みまくりの天は霊、国の水分とは体の事を指す。天の水分とは発音する時に必要とする霊的・心的なエネルギーの補給と言った意味でありましょう。これに対し、国の水分とは体的エネルギーの補給の事です。具体的には発声時の口腔内の唾液なども一つの例でありましょう。実際に心の内容と言葉とを結んで、それを他人に伝えようと発音・発声するためには、それなりの心的・体的エネルギーを必要とすることは、日常生活の上で素直に理解出来ることであります。

言靈ソは注ぐ・添える等の言葉で、言靈セは瀬・急く・堰・責める等でそれぞれの内容の見当がつけられます。

天の久比奢母智（くひざもち）の神・国の久比奢母智（くひざもち）の神

言靈ホ・ハ：久比奢母智とは久しく（久）その内容（比・靈）が豊かに（奢）持ち（母智）続く、という意味であります。ここでも天は靈で、国は体を示します。言葉は心と音の双方が結ばれて出来ます。発音された言葉は、その言葉の内容を何処までも維持し発展する、の意味。言靈ホは穂・火・など、言靈ハは山の辺・舳・凹等に見られます、双方共に先に行って開く姿であります。

佐渡の島。

以上。お話してきました沫那芸の神より国の久比奢母智の神まで八神、言靈クムスルソセイホへの八個の区分を佐渡の島といいます。先に述べました。津島という区分で先天の活動が実際に一つの考えとしてまとめ、次にそのまとまった考えが言葉に組まれる工程が佐渡の島であります。この行程を詳しく調べますと、合計八個の言靈クムスルソセイホへの八行程であるというわけです。これによって、心が肉体の発声器官によって実際に発音されることと成ります。佐渡の島

の佐は助ける、渡（ど）は渡すの意味であり、佐渡の島とは霊と体の双方の働きを実際の言葉として実相として実現・創造する働きの区分、という意味であります。この区分の働きによって、アイデアとしての真名が音声としての神名となつて、口腔より空中に飛び出し行くこととなります。

注一、 霊と言を結んで言葉にすることを渡すというが、これは宗教上でも用いられる。仏教では八苦の娑婆であるこの世（此所）から極楽浄土（彼岸）へ導くことを渡すと言う。人間は本来生まれながらにして仏の子であり救われているのであるが、その自覚がない。その自覚を仏の教えに従って実現し、更にただ自覚するだけではなく、言葉で表現することによって初めて救われた、という証明になる。古事記の佐渡の島の内容と、仏教の度との意味が同じであることは興味深いことである。なお、仏教では救われた自覚の表現だとして詩を用いる。これを頌（しょう）または偈（げ）という。

その 394 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。
神々の生成（子音の創生）13

その 394

古事記の本文に戻りましょう。

次に風の神の名は志那都比古（しなつひこ）の神を生みたまひ、次に木の神名は久久能智（くくのち）の神をうみたまひ。次に山神名は大山津見（おおやまつみ）の神を生みたまひ。次に野の神名は鹿屋野比売（かやのひめ）の神を生みたまひ。またの名は野椎（のづち）の神という。

この大山津見の神、野椎の神の二柱の神、山野によりて持ち別けて生みたまふ神の名は、天の狭土（さづち）の神。

次に国の狭土（さづち）の神。次に天の狭霧（さぎり）の神。次に国の狭霧（さぎり）の神。次に天の閻戸（くらど）の神、次に国の閻戸（くらど）の神。次に大戸惑子（おおとまどひご）の神。次に、大戸惑女（おおとまどひめ）の神。

次に生みたまふ神の名は鳥の石楠船（いはくすふね）の神、またの名は天の鳥船（とりふね）といふ。次に大宜都比売（おほげつひめ）の神を生みたまひ。次に火の夜芸速男（やぎはやお）の神を見たまえ、またの名は火の炫毘古

（かがやびこ）かみといひまたの名は火の迦具土（かぐつち）の神と言う。

ここから次から次へと神々が誕生しますが、このうち志那都比古の神より大宜都比売のかみまでの十神が大和豊秋津島（おおやまとあきつしま）と呼ばれる宇宙区分に属している子音言霊を指す信明神名であります。この区分の前の区分である佐渡の島に属する言霊の働きで、心と言葉が組み合わされ、発声器官によって発声された言葉が空中を飛び、人の耳に聞かれ復誦・検討されて「ああこの事か」と了解され、言葉としての役目が完成され、再び先天の宇宙に帰っていきます。この過程を細かく観察すると十四の段階があり、そのそれぞれが十四個の言霊で表される、ということであります。

また、その十四個の言霊のうち初めの四言霊は発音された言葉が空中を飛んでいる間の姿・内容を表しております。順をおって説明して行きます。尚、最後に誕生しました火の夜芸速男（やぎはやお）の神については後述致します。

その 395 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。
神々の生成（子音の創生）15

その 395

風の名は志那都比古（しなつひこ）の神

言霊フ：発音されて 空中に飛び出した言葉は もうそれで発生した人と 関係がなくなるわけではありません。志那都

（しなつ）とは ^{こころざし}志の内容である言霊（真名）が ことごとく（那）言葉（都・霊屋子）として活動しています。

風の神の風とは息ことでありましょう。言霊フはその心です。吹く・伏す・踏む・・・などに見られます。

木の神の名は久久能智（くくのち）の神

言霊モ：久しく久しく能（よ）く智を保っている、という意味。木の神の木は氣であり霊を表します。言霊モは茂・盛る・

森等に見られるように、茂り発展する形。発声されて空中を飛んでいる言葉は人間の気持ちを何時までもよく保持し伝え

ます。

山の神名は大山津見（おおやまつみ）の神

言霊八：山は八つの間であります。父韻チイキシリヒニが

発現する図です。八つの中に父韻がそれぞれ入ります。

その中心を引き上げた立体図は山の形と成るでしょう。八間の中の父韻の働きが佐渡の島の区分の働きで渡され、現れ

たものが言葉です。言霊八は葉であり、言の葉というように言葉のことです。父韻ヒが「言葉の表現が宇宙の表面に完成

する韻」であることを思い浮かべますと理解出来ましょう。

山の神、名は大山津見の神と初めに山とあるのは、言葉に霊波・音波の起伏があることを示しています。波の高いところ

は父韻であり、低いところは母音であるということが言えます。

中国の老子という本に「谷神は死なず」という文句があります。谷とは山の低いところのことで、母音を表し、母音は

先天宇宙の音で有り、永遠の实在であり、変わることがありません。

その 396 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）16

その 396

野の神名は鹿屋野比売（かやのひめ）の神またの名は野椎（のづち）の神

言霊又：鹿屋野（かやの）の鹿屋とは 神の家である 言葉の意味で神名であります 真名が 口で発声されて 神名

（かな） となります その神名 が 空中を飛んで 大山津見（おおやまつみ）である 言葉となり 山が終わって 鹿屋

の野に降りてきた という洒落た表現であります。山から野に下って そこで人に聞かれることとなります。耳の鼓膜を叩く

ので野椎（のづち）の神とも云っています。言霊又は貫・抜く・縫う・温もり等の言葉に見られます。

以上お話ししました フモハヌの四音の言霊は 発生された言葉が口腔 離れて 空中を 飛んでいる時の状態を表してい

ます。人の身体とは 離れた外界のことですので、風 木・山・野・の神として、自然物の名前が付いているわけ

です。この発声されて 空中を飛ぶときの言霊を 神名（かな）と呼びます。

そして耳で聞かれ 復唱され 了解される過程で 再び 真名に帰ることとなります。言葉は 人の口を 離れれば、その生命が失われるという別ではありません。空中を飛んでいる時も ちゃんと その内容 エネルギーは維持され 人に聞かれて 影響を与えます 。でありますから、人間の 精神生命の 範囲とは 言葉の影響が 及ぶ すべてのところとすることができ 結局 人間生命の存在領域は 宇宙である ということになります。決して 一個の肉体だけに限定されているわけではありません。それでありますから 宇宙の中に起こる現象のすべては 言霊という観点にまで集約しますと、この話の中で述べております 五十音言霊に還元して表現することができ、残すところがないのです。

大山津見（おおやまつみ）の神・野椎（のづち）の神の二神 山野によりて持ち別けて生みたまふ神の名は

発生された言葉は空中を飛び 大山津見の神で山を越え 野椎の神となって野に下ってきました。そこで言葉が自分ま

たは他人の耳に入ります。聞かれた言葉はそこで次々に現象を生みます。それを言霊で表しますと、ラサロレノカマナコ
の十言霊となります。

その 397 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。
神々の生成（子音の創生）17

その 397

言霊ラ・サ

天の狭土神（あまのさづちのかみ）、国の狭土の神（くにのさづちのかみ）

狭土とは耳孔の狭いところの椎（槌）の意味。天は霊を、国は音を分担していることを示しています。言葉が耳孔
の狭いところを入れて行く様を言います。言霊ラは螺旋の字が示すように螺旋運動のことです。言霊サは刺す・指す・差
すが示すように一定の方向に向かったの浸透状態であります。

言靈ロ・レ

天の狭霧（さぎり）の神・国の狭霧（さぎり）の神

狭霧とは、言葉の霊と言とが霧のようなバイブレーションとなって耳の孔の奥へぐるぐる廻りながら入り込んで行く様であります。

言靈ノ・ネ

天のくらど聞戸の神（くらど）、国のくらど聞戸（くらど）の神

細い 耳の孔の 奥に入り込んだ言葉は その霊と言の波動が くらがり聞がりの戸（くらど聞戸）に突き当たります。聴覚器官のことです。そこで 言葉は 改めて ふくしやう復誦されます。言靈ノ・ネは 宣る・音に通じます。有音の神名である言葉が脳内で 真名に変換されるために、まず 音が宣られることとなります。言靈ノは宣る・乗る・退く等の言葉に、言靈ネは音・値・根・願う等に見られます。

言靈カ・マ

おおとまどひこ おおとまどひめ
大戸惑子の神・大戸惑女の神

古事記神代の巻きの文章の 中に 著者 太安万侶 の頭脳の冴えは随所に見られますが、この言靈カ・マを指す指月の指として大戸惑という 神名を 当てたことなどは、その冴えの 1 つでありましょう。まさに絶妙と言えます。言靈力は 搔き・掛く・借りる・貸す等に見られ、言靈マは巻く・混ぜる・丸める等で考えられます。有音の神名が耳で聞かれ復誦され入ってきた言葉がどんな意味を持っているか、と頭の中で搔き混ぜられ煮つめられます。

カマ即ち釜は物を煮詰める道具です。そのことによって言葉の内容が 次第にはっきりしてきて 有音の神名が再び真名に変換されていきます。そして大戸惑子（おおとまどひこ）の神は言葉の霊を、大戸惑女（おおとまどひめ）の神は言

葉の言（音）を受け持っています。耳に入ってきた言葉が言霊ノ・ネ（宣音）で復誦され次に言霊、次に言霊カ・マで

その内容・意味を「こうかな、ああかな」と大いに戸惑いしながら了解されてゆく働きに対して、大戸惑という男女神の名

を当てた事などは誠に洒落ているではありません。

その 398 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）18

その 398

言霊ナ

鳥の石楠船（いはくすふね）の神・またの名は天の鳥船（とりふね）

言葉が頭の中で見つめられ ああこういふことなのだ と その内容が 了解されます。了解された 内容が「ナ」であり

名であります。「名は体をあらわす」などと申します。了解された内容が その事物の実相です。言霊ナは 名前・成

す・ かん慣れ・萎える等に見られます。

鳥の石楠船の鳥は十理の意味です。ア（吾）とワ（汝）との間に双方を結ぶ八つの封印父韻が入って現象子音を生みます。父韻は私と貴方との間を飛び交いますので 昔の人は鳥にたとえました。アとワと父韻で 十数となり現象を生む理となります。石楠は 五十の葉である五十個の言霊を組んで澄ますの 意味。すると五十音図が出来上がります。船とは五十音でできた言葉を運ぶもの御船代と呼びます。神社で神様を乗せる船といいます。鳥の石楠船の神全部で「言霊の原理に基づいて五十音言霊図上で 確かめられた物事の内容」と言うこととなります。

またの名 天の鳥船も同様な意味です。発言され、人の耳で 聞かれた言葉の内容がここで確定・確認されます。このように発声され人に聞かれ、その内容（ナ）が確認される時、初めて私と貴方の交渉で生み出された現象が、私と貴方と離れた第三者である「子」としてその存在が確立されることとなります。その「子」が次に生まれます大宜都比売の神すなわち言霊コであります。父と母との間に生まれた子が父母とは違う第三者としての存在となります。甲と乙の間で 1 つの契約が取り決められますと、その契約がかえって甲と乙とを縛る存在となりますのも、その契約が甲と乙と離れた第三者になったからであります。

その 399 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）19

その 399

言霊コ

おおげつひめ
大宜都比売の神

大宜都比売とは大いに宜しき言葉（霊屋子）を秘めて（比売）いる、という意味。言霊子音のことです。

物事の実相であり、またその最小の単位のことです。伊耶那岐・美の二神、言霊イ・母の呼び合い（よほ婚い）に

よって私と貴方との間に交流が起こり、現象を生みます。その現象の最小の単位となるのが言霊子音です。

母音と半母音の交流は、その橋渡しの役割である父韻が母音に働きかける形となり、結局八つの父韻と四つの

母音 八と四との相乗積で合計三十二の子音が誕生します。父と母が呼び合って子が生まれます。

前にもお話ししましたように、子音は父と母との結合によって創生され、父と母との双方の性質を受け持っておりますが、それでいて父と母から独立した第三者としての存在です。主体と客体、心と体の双方から生まれ、そのいずれとも違った実相（現象の姿）の単位であります。お大宜都比売の神・言霊コは現象子音であり子であります。その前に誕生しました鳥の石楠船の神 言霊ナは、子の内容といった意味を持っています。

伊耶那岐・美二神の子生みによって誕生してくる三十二の神々 すなわち三十二の子音についてお話ししてきました。これら三十二の子音言霊については 数理的・概念的・比喩的な説明 ならともかく、そのものズバリの指摘が行われまはるは世界の歴史上ここに挙げます古事記ともう一つ日本書紀があるに過ぎません。誇張でもなんでもなくこの二千年の間 日本と世界の人々が物事の現象の最小の単位である言霊子音の説明に接することができますのは 古事記 と日本書紀の「子生み」の文章以外には見られない重要なことでありますので、「子生み」の文章の要点をもう一度おさら

いとおきたいと思います。言霊子音の解明は世界中の宗教書・東洋哲学の奥義秘伝なのですから。

注一： 従来現象の単位の説明として概念比喩的にはあるが、中国の易経があげられている駅の成立に関しては、昔から伏羲（ふくぎ）五「千年前の王と言われている」が初めて八卦を画し、文王（ぶんおう）が篆辞（てんじ）を作り、周公が爻辞（こうじ）を作り、孔子が十翼（じゅうよく）を作ったと称せられている。その爻辞というのが現象の単位を説明したものである。十翼は易の哲理や組織について説明したもの。

その 400 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

子音の説明の続きです。

神々の生成（子音の創生）20

その 400

古事記で「天津神諸々の命」と言われます。先天十七神十七言霊の活動が起こり、それが一つの考えにまとまり（津島）、その考えが言葉に組まれて口で音声として発音され（佐渡の島）、その声が空中を飛び、人の耳で聞

かれ、復誦検討された後、「こういう事だったのだな」と了解され、心と言葉の循環が一段落して、言葉としての真名（まな）が、再び最初の先天に帰ります。

以上のように一つの発想が言葉となって発音され、それが耳で聞かれ確認・納得されて初めて一つの出来事が決定されます。子である現象の実相が生まれます。人間の心は、このように循環して現象を生みますが、この心の一循環を詳しく正確に観察しますと全部で三十二個の行程があり、その一つ一つの工程が以上説明してきました三十二の子音で示されるのです。

人間の頭脳内に起こったひとつの発想が事実となって生まれるまでに三十二の子音で示される工程をたどることがお分かりいただけたことと思いますが、その生まれる事実（出来事）を構成する最小単位がまたその三十二の子音である、ということ。これはなんとも奇妙で巧妙なことではありますが、全くの事実です。この奇妙であるが事実としてあること、こ

れも心の最小単位である言霊にして初めてあり得ることであって、前にも申しましたように「言霊の幸倍へ」と呼んでいます。

この言霊の原理の妙はしっかり御記憶願いたいと思います。

大倭豊秋津島（おおやまとよあきつしま）、またの御虚空豊秋津根別（みそらとよあきつねわけ）

以上発音された言葉が空中を飛び、耳で聞かれて確認され現象が確定するまでの心の区分、志那都比古（しなつひこ）の神より大宜都比売（おおげつひめ）の神までフモハヌラサロレノカマナコの十四言霊の位置を大倭豊秋津島（おおやまとよあきつしま）と呼びます。ここまでに五十の言霊が全部勢揃いしますので、大和（大倭・おほやまと）であり、それがすべて豊かに明らかにあらわれる（豊秋津）区分（島）というわけであります。それはまた、先天から（天つ御虚空）豊かに（豊）明らかに（秋）現れた（津）音（根）区分（別）でもありますので、天つ御虚空豊秋津根別（みそらとよあきつねわけ）とも呼ばれています。

注一：心の一循環は文章で説明すると長くことかかることになるが、人の発想から確認まで、実際には一瞬の間であることが多い。この心の循環を仏教の天台宗では一念と呼ぶ。その一念の内容は説明せず、ただ数理で示し、一念三千と言う。

その 401 につづく